

# 日常

柳瀬川ひろし

「リク！ちよつとこれ見てえ」

母さんが、どこからかバカでかい声でボクを呼んでいる。

「どこにいるの？」

ティッシュを丸めて右の鼻の穴を掃除していたボクは、ティッシュを突っ込んだまま立ち上がり母さんを探した。

ゴールデンウィーク明けの最初の土曜。初夏を思わせる気候は、ボクからやる気のすべてを奪い取って我が家をほっこりと包み込んでいた。

母さんは、見える場所にはいなかった。ボクは視線を低くするためうつ伏せになった。匍匐前進の態勢だ。5, 6歩進んでリビングの方に目をやると床に寝転がって雑誌を見ている母さんが目に入った。

ボクは、そのままの態勢で静かに目標物に近付いた。母さんは気付いていない。たぶん。

ボクは、母さんの脇腹をつまんで驚かせてやろうと手を伸ばした。そして、正に目標物であるちよつとたるんできた脇腹をつまもうとしたその瞬間、母さんは目にも止まらぬ速さで横向きになると、頭の方に体を少し移動させた。

油断していたボクの手は、思い切り母さんのお尻の肉をつまんでいた。

「キャー、チカンでえす！」

ボクの手を素早くとらえた母さんは、痴漢に負けない女子学生のようなキラキラの瞳で笑っていた。

息を止めて笑いを我慢したボクの鼻から、栓になっていたティッシュが、どこかへ吹っ飛んでいった。

つかまったボクの手は、やがて静かに母さんのお腹に置かれた。お腹はびくびくと小さく波打っていた。笑いをこらえているのだ。

母さんはいつだってそんなふうにボクを笑わせてくれる。

だから、ボクは母さんと二人きりの生活に何の不満もない。ないはずだ。

父さんのことはあまり記憶にない。

手をつないで川の岸辺りを歩いてくれたのは、たぶん父さんだ。ボクは岸から川の中を覗くのがとても好きだったらしい。後から母さんに聴かされた話だ。

父さんはリクのこと、本当によく散歩に連れて行ってくれたのよねえと話す母さんは、穏やかに微笑んで、ずうっと遠くを見る目をしている。

ボクは父さんのことを自分から母さんに訊いたことはない。母さんを悲しませたくないからだ。小さい頃からずっとそう思っていた。

父さんのことを口にすると母さんが悲しむだろうと。父さんは、何かどうしようもない訳があって家を出ていったのだろうと。

ボクはカニのことをよく覚えている。

赤みがかった小さなカニが岸壁や石積みの間にいると、いつまでもその場を離れようとはしなかったらしい。

詳しい情景は覚えていないが、カニを見た記憶だけは、はっきりと残っている。

なにしろボクの家馬は優秀だ。海馬と言っても馬の種類ではない。脳の話だ。この場所に記憶が長い間保管されているのだ。というか、ある事柄が保管されるから記憶と呼ばれるのだろう。

ボクは、テレビで観た脳科学者のもじゃもじゃの髪の毛が好きで、その話を記憶した。父さんの思い出も必ずそこにあると信じて。

ひとしきり笑っていた母さんが、持っていた雑誌をボクの目の前に差し出した。

近過ぎてピントが合わない。

「母さん、近いよ」

「ほら、見てみい。ここんどこ」

「なになに、山村<sup>やまむらりゅうがく</sup>留学？母さん、ヤマムラって有名な人？」

「あんた、もう5年生やろ。ヤマムラじゃなくて、サンソンじやい」

「なんか、聞いたことある。しばらくの間、田舎で暮らす。自給自足みたいなの」

母さんは満足気に頷いて、人差し指でページの右下にあるちっちゃな記事をつつついた。

その記事には、小さいながらも太字で「山村で田んぼ留学」と書いてあった。

「リク、どう思う？あんたの好きなカニがいるらしいよ」

ボクはその記事を読んでみた。

「高知の田舎の山の田んぼで暮らそう。遊びや食事はすべて田んぼ周辺の物ですませる。労働は草刈りと田んぼの草取りが中心。留学が終わる頃には君は立派な田んぼガキ」

「母さん、田んぼガキって何だろうね。柿の一種かなあ」

「リクが柿になってどうする。たぶん田んぼに詳しい、田んぼのことがよく分かった子どもってことでしょ」

「田んぼかあ」

ボクは、社会の教科書をペラペラめくって米作りの勉強があることを知っていた。なので、勉強の役に立ちそうだねと消極的な賛成の態度を表明して起き上がった。

「ほんとにカニいるの？」

母さんは、パソコンで詳しく調べたらサワガニがいると書いてあったと、いつの間に始めたのか腹筋をしながら答えた。

「それじゃあ、リクの好きなインスタント・ラーメンでも作るとするか。リクが」

「ボクがかい！」

休日は母さんにのんびりしてもらいたい。だから、ボクはできるだけいろいろなことを手伝うようにしている。

「それでは、インスタントの達人が腕をふるいましょうか」

「あッぎーす」

「母さん、恥ずかしいからちゃんとありがとうございますって  
言おうよ」

ボクは、もう一度匍匐前進の態勢になり、台所に向かって進み  
始めた。母さんのお腹を乗り越えて。

商店街のツバメが巣立ち、アイスで朝食を済ませたい季節になった。

母さんと二人でインスタント・ラーメンを食べながら、テーブルに落ちた汗の粒の数が多い方が勝ちというゲームに熱中していると、郵便物が届いた音がした。

ボクは急いで立ち上がると、ドアの郵便受けから郵便物を取り出した。

緑一色のその封筒には高知県の消印があった。

「母さん、来たよ。ヤマムラさんから」

「16個！わたしの勝ちい！」

母さんは、ボクの話など全く聴いていなかったかのように、勝利宣言を絶叫した。

「今日の夕食はリクが作るんだよお」

母さんは心底嬉しそうな顔をして、今度は汗の粒で何やら絵を描きながら言った。

「雪舟じゃないんだから。それよりこれ読んでよ」

「はいはい。夕食頼んだわよ」

母さんは、どれどれと言いながら封筒を開き、みふあみふあと呟いている。中から白い紙を取り出し、そらそらと声を上げ、紙を見ながらしどしどと確認するように首を振った。

「母さん！まじめにやってよ。何て書いてあるの？」

申し込んだときにはあまり積極的でなかったボクも、夏休み前のこの時季には連絡が届くのを毎日心待ちにしていた。

「パスポートが入ってたわ。田んぼ王国へようこそ、ですって。



あとは持ち物とか注意事項みたい」

留学の期間は最低1週間と決められていた。

ボクは窓から空を見上げた。入道雲がボクを見下ろしていた。天気図を思い浮かべながら、西の空を見た。雲一つない青空だ。

「母さん。高知ってフルーツトマトの故郷らしいよ。カツオはあまりとれなくなっただって。八百屋さんで見かける野菜の箱に高知と書いてあったよ。ナスやピーマンだった気がするけど」

ボクは高知について知っていることをもっと思い出そうとしたが、もう何も浮かんでこなかった。

「リク、どんぶり片付けといたわよ」

母さんは持ち物そろえておかなきゃねと言いながら、ボクの隣りに座って同じ空を見た。

「お米の美味しいところってどこだか知ってる？」

ボクは社会で学習していたので、母さんの質問にすぐ答えた。

「東北地方でしょう。秋田とか。それから北陸だけど新潟」

「最近はね、日本の各地で美味しいお米がとれるらしいのよ。例えば高知でも」

「えっ、そうなの。田んぼ留学の場所は、お米美味しいかなあ」

「どうだろうね」

ところで、と母さんはボク目を覗き込んだ。

「リク。あなたは高知県のどこに留学するのか知ってるの？」

ボクは母さんに訊かれて初めて気付いた。ボクはいったい高知県のどこに行くのだろう。

さっそく日本地図を引っ張り出して、四国が大きく載っているページを開いた。

「ねえ、母さん。なんて村なの？」

「それがね。村じゃないの。さ・か・わ・ちよ・う。けっこう都会かもよ」

ボクは天気の移り変わりのように、西から東に向かって指でなぞりながら佐川町を探した。ボクの指が高知県のほぼ真ん中あたりまで来てその町は見つかった。

特にニュースで耳にしたこともないその町は、ボクの人生初の

大冒険にとって、申し分のない場所に思えた。

西の空にはいつの間にか羊のような小さな雲が浮かんでいた。

それは、さっき母さんがテーブルに描いていた絵にとっても似ていた。